

住まいと働く場が融合調和し、個性を放つ魅力ある都市を目指して欲しい。

—— 九州大学大学院芸術工学研究院 准教授 田上健一氏



田上 健一(たのうえ けんいち)

熊本高校、筑波大学、マンチェスター大学大学院修了。博士(工学)東京大学。(株)日本設計勤務後、琉球大学工学部助手を経て現職。

「冷泉まちなみ演出プロジェクト」など数多くのプロジェクトを主催し、建築家の立場から、地域のまちづくり活動に貢献されている。

#### 専門家と市民の「協働」が芽生えた 25 年前

私は建築計画と地域計画が専門です。その立場からみると、ちょうど 25 年くらい前が、‘市民の参加’とか‘市民と一緒に’といった「協働」の概念が芽生え始めた頃で、専門家の知識や経験と「市民知」とか「生活知」といった市民の知識や経験の融合が図られ調和していく時期にあったと思います。

私は熊本出身で、同じ九州でも熊本は福岡よりも保守的だと感じますが、福岡の場合は、市民、企業、行政など、それぞれの立場がわりとフラットでリベラルな関係で結ばれていて、それぞれの立場から活発な議論が行われたりしています。そんな土壌もあって、専門家と市民の「協働」ということが上手く融合し調和が図られてきたと感じています。

ここ数年は、まちづくりのさまざまな場面においても、部分の相互作用が組織化することで価値を最大化したり、既存の枠や境界線を越えて新しいものを生み出していく、という意味の「創発」という言葉がよく使われます。今後も、建築に限らず色々な分野で、専門家や行政が交流の場やイベントを提供しながら市民の力を

取り入れていくスタイルが洗練されていき、また、福岡のローカルな関係に限らず、中国や韓国などアジア、そして世界中の人たちと、フラットな関係で「創発」が醸成されていくと思いますね。

行政の公共建築や公園づくり、あるいはこのようなビジョンづくりに市民が色んな形で関わって、専門家の知識や経験に「市民知」が上手く融合した取組みが一つのモデルとなって、中国をはじめとしたアジアの国々のお手本になっていけば素晴らしいと思います。

都市の歴史をみると、18 世紀にリスボンで大地震があり、それまで世界を覇権していたポルトガルの国力はそれ以降一気に落ちました。しかし、ポルトガルの人たちが今不幸せかというと、実際はとても楽しそうですし、街並みは綺麗で、生活の質がとても高いと感じます。日本ももしかしたら震災で、これから縮小化が進み国力が落ちていくことになるかもしれませんが、住むことの幸福度が上がり、まちを楽しむことができ、ある程度の知識と情報と資本が整備された社会の方が、幸せなのではないかと思います。福岡には優秀なデザイナーもいるし、

コミュニティの力もあるし、色々な人が関わりながら協働する社会の実現が可能ですので、世界的なモデルになっていけたらいいと思います。

### 住宅政策をしっかりとつくり

都市には色々な性格があって、工業都市であったり、産業都市であったり、最近、福岡は知識創造都市などに取り組んでいます。どんな性格の都市であっても、根幹となるのは「人が住む」ということで、それによって活力が生まれ都市が発展することは間違いありません。

世界史的にみても、政治や宗教施設がとて立派でも住宅が粗悪であったギリシャ都市など、住宅政策がしっかりとしていない都市の繁栄は、長続きしません。

これまで、福岡はマンションなど集合住宅への民間投資がわりと活発だった分、公的な住宅政策が不十分だった面があると感じています。公的な住宅政策とは、公営住宅(市町村営住宅)、公社住宅(住宅供給公社住宅)、公団住宅(UR都市機構)の三つを指しますが、1990年代初等頃までは実験的・先導的な取り組みで集合住宅の計画技術をリードしてきました。福岡では、地場も含めたデベロッパーによる民間投資が非常に活発だったこともあり、一定水準以上の集合住宅が供給されたり、百道や香椎に代表される先進的な集合住宅団地が生まれました。先進的というのは形や色が奇抜という意味ではありません。多くの人に開放される広場や、住む人と住む人を繋ぐ共有空間を持つ集合住宅は、もっともっと増えていいはず。しかしながら、現在供給されている集合住宅の多くが画一的な、いわゆる箱状、板状の積層型の詰め込みの大量供給型であるというのも事実です。もちろん、これは供給側だけに問題があるわけではなく、購買者側のニーズにも理由があるのですが、全体的に住宅のレベルは高くありませ

ん。

逆に、公共施設や公園に関しては、結構質が高く、非常に豊かな生活空間の一部として調和しているものがあります。このような空間が、集合住宅や個人所有の建築に作用して、生活の質を高め、さらに豊かな生活空間を広げていくことにつながってくれば、素晴らしいと思います。

福岡の住みやすさが外部から評価されているのは、交通の利便性、商業の集積、食べもの美味しさなど、たぶん複合的な理由があるのだと思いますが、建築の立場からみると、1つひとつの住宅や集合住宅の住空間としてのパブリックスペースやコモンスペースといった共有の場の作り方が不十分な面があると感じます。そういった面を、もう少し政策的にリードしてもらえれば、都市全体がもっと魅力的になり、福岡の価値がさらに上がると思います。いわゆるプロパティマネジメントですね。

### 都市計画は色分けでなく混ぜて綺麗な色に

住宅政策を含む都市計画の考え方として「コンパクトシティ」や「ニューアーバニズム」というものがありますが、さらに、居住環境と産業・商業環境がもっと上手く融合するような政策が実施されたらいいと思います。

一例を挙げると、横浜の中華街のすぐ近くで、そこにマンションが建ちました。純粋なマンションというのは、1階がそこに住む人だけのエントランスで、中華街のような賑やかな空間で、そこだけポツンと閉ざされた空間として存在することになりました。その結果、そこだけ街の賑わいが途絶えてしまって、連続する中華街全体の魅力が損なわれてしまいます。都市の中では、住むところ、働くところ、商いをするところを、あまりに綺麗に分離しすぎると活気や賑わいが失われる要因になりかねないので、上手く融合させるデザイン力が非常に大切です。

東京の大田区や品川区の下町には、町工場と住宅が一緒になっているところが多くて、住むところと働くところが分離されていないから、さまざまな活動が融合していて、すごく活気がありますよね。居住環境と商業・産業環境が融合したものになれば、もっともっと都市の魅力を発信できると思いますので、そこを都市政策が担いながらリードしていけばいいと思います。

これまでの都市計画では、まず線引きをして、用途地域を決めていくやり方をしてきました。住居地域、商業地域、工業地域それぞれを青、赤、黄といったような色分けをするのですが、これからは青赤黄色をどう上手く「塗り分け」るのではなく、青赤黄色をどう上手く「混ぜ合わせ」て綺麗な色で描くかという考えに立ったまちづくりが必要になると思っています。

日本全体は社会も人口も縮小していますが、居住と産業と商業が融合した個性のあるまちとして、生活の質が拡張していくまちづくりを目指して欲しいと思います。抽象的な言い方かもしれませんが、行政にはこのような方向にリードしてもらうことを期待しています。

### 輝く個性があるアーバン・ビレッジをつくろう

私の研究室では、櫛田神社界隈のまちづくりである「冷泉まちなみ演出プロジェクト」という活動を4年くらいやってきました。大学、地域、行政が連携して相互対話の中でまちづくりを考えて実践するというものです。始まりは、道路景観計画の委員として関わったことがきっかけでした。福岡市が国交省の都市観光のパイロットモデルに申請して採用された「博多情緒めぐりキャンペーン」と連動し、冷泉のまちづくり活動に参加しました。‘のれん’を作ってお祭りで使ったり、‘ばんがさ’や‘ばんこ’で都市の中にコミュニケーションスペースを作ったり、古い地図などを作ってまちの賑わい

創出を考えたり、景観について地域で勉強したり、と色々やりました。地域が一体となって、来訪者をもてなすアーバン・ツーリズムは今後盛んになってくるでしょう。

福岡には、このような冷泉地区のように都市の中でも非常に濃密なところが残っているのです。小さいけれどきらりと光る個性があって濃密な都市の中のまちづくりを、専門的には「ディストリクト・アーバニズム」とか、「ローカル・アーバニズム」と表現して、日本語では「部分の都市化」と言います。別の言葉では、「アーバン・ビレッジ」という言葉も使ったりします。都市の中の村という意味ですね。福岡では、冷泉地区の他に、姪浜の唐津街道沿いの町並みなどの伝統的な空間、あるいは大名や今泉など、または美野島などの商店街など様々な個性ある場があります。

日本では横浜などで都市の中の公共的な居場所づくりが結構盛んですし、世界的にもそんな流れがあります。

都市の大きなビジョンを考えることは、非常に重要ですが、一方でこういった小さいけれど輝く個性がある地域から、より広い都市に広げて考えていくことも大切なことだと考えています。そして、もう一つ大事なことは、市民の参加を促すことで、その地域の個性が平準化して丸くならないことです。何か尖ったり、きらりと光ったりする個性がとても重要な要素となるからです。

### 優秀な若者が活躍できるチャンスを

このような「アーバン・ビレッジ」の活動において、学生の役割は大きいものがあります。福岡は学生がたいへん多くて、我々の建築や都市デザインの分野でも優秀な学生や若い専門家の卵がたくさんいます。我々の芸術工学部など福岡にある高等教育機関がプロとして役割を担っていく人材を実際のフィールドに供給

しているとう自負もあります。大学と地域と行政が連携しながら、課題を調査研究して具体的なデザインや仕組みを提案しています。

‘Fukuoka デザインリーグ’など色んな活動もありますし、それらが上手く融合して都市がますます発展していけばいいと思います。

私の研究室には20人くらいの学生がいます。ほとんどが九州出身者ですが、ほぼ100%東京に就職します。優秀な人材の受け皿が福岡に不足しているという話もあるでしょうが、建築や都市デザインの分野では、そんなことはありません。福岡にも建築事務所や不動産事業者は沢山ありますし、受け皿がないことが東京へ行く理由ではないような気がします。優秀な学生は「江戸で腕を磨く」みたいな東京に対する思いがあるのでしょうか。

福岡は確かに学生が多いですが、九州各地から集まった若い人は、卒業後、福岡を出て行く数も相当います。野心的な男子学生が福岡に残らないことも、福岡の30代女性の未婚率が高くなっている一因かもしれませんね。

学生の質の面でももう少し述べると、研究室である保育所の建て替えのプロジェクトを進めているのですが、保育士さん、保護者、地域の住民、などと一緒にワークショップを進めます。細かなことを決めるにも、厳しい意見があったり、結構時間がかかったりするのですが、学生たちは、嫌な素振りも見せず、ボランティア的なこともポジティブに非常に元気にやっています。一般的には、最近の若者は社会と触れ合うことを嫌がったり、閉鎖的だったり、草食系だと揶揄されがちですが、全くそんなことはなくて大変優秀だと感じています。特に女子学生は積極的で活動的です。東京の学生とは違ったいい意味での純朴さを持っていて真面目な学生が多いので、福岡、九州も捨てたものじゃないと感じています。

そんな学生の姿に触れているからこそ、東京

へ一度は行っても必ず福岡、九州へ帰ってきて欲しいと思います。そんな若者が活躍できるチャンスがもっともっと広がればと思います。

### 組織プレーで価値を上げよう

福岡が本当の意味で住みやすくなっていけば、東京に行かず残ってくれる若者も増えるかもしれませんね。

沖縄の大学に勤務した経験もありますが、沖縄は一見すごくオープンですが、ある一定のところからは先に入れない部分があります。これは住んでみないと分からないところですけどね。京都は逆で、非常に敷居が高いけど、一度入ってしまうと密接な関係が持てたりします。沖縄と京都は良く対比されますが、福岡、九州にはちょうど中間的な程よい土壌があると思います。当然、局地的には色々あるでしょうが、全体的に人を受入る距離感の心地よさみたいなものがあるように感じます。

若い人が残って、色んなことにチャレンジしやすい素地はあるので、是非サポートできるような仕組みがあればいいと思いますね。

それから、先程、学生が素直という話をしましたが、九州には、あまり結果を恐れず「みんなやってみようか」というような素直さ・従順さが備わっていると感じます。今、直方で伝建群（伝統的建造物群保存地域制度）指定に向けて、文化庁、福岡県、直方市から委託を受けて調査をしています。これは地元住民がいかにもとまるかが鍵になります。広島や関西でも同じような調査の経験がありますが、直方と違ってなかなかまとまりません。福岡県には、そんな伝建群が、八女の福島、黒木、うきはの筑後吉井、朝倉の秋月、と4カ所あって、直方が5カ所目を目指しています。八女などは「みんなやってみようか」という気質が広範囲に渡っていて、‘なでしこジャパン’じゃないですが、いわゆる組織的な連携プレーができていま

す。

建築の分野では、どうデザインするかより、その建物をどうメンテナンスしてどう使っていかということデザインすることがこれからは重要です。そのことにより、土地の価値が決まっていく部分があったりもします。住民が協力しながら上手く環境をつくっていけば、質も上がり、土地の値段も上がり、さらに質が上がっていくという良いスパイラルになります。21世紀の都市は、あらゆる人があらゆるレベルで組織的に連携し、管理し、運用していくことが大事です。そんな21世紀をリードしていく都市を目指してほしいと思いますし、福岡、九州はそれができると思います。

インタビュー日:2011/7/27 文責:URC 栗原